

附属学校と英語教育コース協働プロジェクトの成果と課題 —附属中学校English Dayを通しての中学生と大学生の学び—

高田純子**・須田香織**・岩崎香織**・林 高宣*・縄田裕幸*・猫田英伸*・大谷みどり*

Junko TAKATA・Kaori SUDA・Kaori IWASAKI・Takanobu HAYASHI・
Hiroyuki NAWATA・Hidenobu NEKODA・Midori OTANI

Achievement and Challenges of the Cooperative Project between the Junior High School Attached to Shimane University and the University's English Education Course

—What Junior High School Students and University Students have Learned from “Fuzoku English Day” —

要 旨

島根大学教育学部附属中学校英語科と言語文化教育講座英語教育コースは平成22年度より、協働プロジェクトの一つとして「附属English Day」を実施してきた。本プロジェクトは、留学生をはじめとする外国からのゲストを10数名、附属中学校に招き、中学生を対象に英語でワークショップを実施すると同時に、英語教育コースの学生は、各ワークショップで留学生と中学生の支援を行ってきた。本プロジェクトが目指すところは、附属中学生の英語運用能力の向上と国際理解の促進を図ると共に、英語教育コースの学生には、中学生と留学生の支援から教育実習の場とは異なる学びの場の提供である。本稿では、プロジェクトの開始経緯やシステムと共に、具体的な活動紹介、中学生・大学生に実施したアンケートの概要を報告する。

【キーワード：英語教育，附属学校園，中学生，大学生，協働プロジェクト】

1. はじめに

島根大学教育学部附属中学校英語科と言語文化教育講座英語教育コースは、平成22年度より年に一回、協働プロジェクトとして「附属English Day」を実施してきた。本プロジェクトでは、附属中学生の英語運用能力の向上と国際理解の促進と共に、(主として英語教員を志望する)英語教育コースの学生が中学生と留学生とのコミュニケーションを取り持つ経験を通して、外国語教育における支援のあり方について学ぶことが期待されている。

附属English Dayの仕組みは以下の通りである。大学の留学生をはじめとする10～16名程度のインターナショナル・ゲスト(以下、ゲスト)を附属中学校に招き、各ゲストが英語で計画したワークショップを校内でそれぞれ分かれて同時展開する。中学生は12名ずつほどのグループに分かれ、三つのワークショップを回り留学生と直接コミュニケーションを図る。英語教育コースでは、学生のこの協働プロジェクトへの参加を、学部の「1000時間体験学修プログラム」の専攻別体験活動(2～4年生対象)として位置づけている。学生は担当のゲストとワークショップの企画段階から関わりながら準備を進め、English Day当日は各ワークショップの中で中学生と留学生の支援を行う。

本稿では、このプロジェクトについて、(1) English Day実施までの経緯と、そのシステム、(2) 具体的な

活動紹介(昨年度の取り組みから)、(3) 中学生と大学生を対象としたアンケート調査の報告、(4) 今後の課題という構成で実践報告を行う。

2. 附属English Day実施までの経緯とそのシステム

(1) 附属English Day実施までの経緯

OECD(経済協力開発機構)のPISA調査や、IEA(国際教育到達度評価学会)のTIMSなどの調査結果を踏まえて検討された平成20年1月中央教育審議会答申に基づき、中学校学習指導要領が改訂され平成24年度から全面実施となった。そして、外国語科の改訂に関する四つの基本方針を踏まえ、附属中学校英語科でも教育内容の改善を図ることとした。中でも、附属English Dayの実施を検討するにあたっては特に以下の二つの方針に注目した。

- 自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視する観点から、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどを結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、4技能を総合的に育成する指導を充実する。
- 中学校における「聞くこと」、「話すこと」という音声

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

** 島根大学教育学部附属中学校

面での指導については、小学校段階での外国語活動を通じて、音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、指導内容の改善を図る。併せて、「読むこと」、「書くこと」の指導の充実を図ることにより、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の四つの領域をバランスよく指導し、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培う。

これらをキーワードを用いて分かりやすくまとめると、以下ようになる(図1)。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①考えを発信する力 ②単語や文を活用する力 ③まとまりのある一貫した文を書く力 ④受信から得た情報・知識を自分の体験や考えと結びつけて発信する力 ⑤小学校の外国語活動を踏まえた指導内容の改善 ⑥バランスのよい四つの領域の指導 ⑦生涯学習としての外国語の基礎固め |
|--|

図1 現行の学習指導要領改定の趣旨(一部)

①～④は生徒に身に付けさせたい力であり、⑤～⑦は望ましい授業づくりの方向性、または教師の指導のあり方である。言い方を変えれば、前者の内容を達成するためには後者の内容を充実させることが必要不可欠である。

平成22年度に附属English Dayを始めるにあたっては、上記のような平成24年度の学習指導要領の全面実施を見越したうえで、「英語は相手と意思疎通をしたり、情報伝達をしたりするための道具の一つであり、実生活で使うものであることを体得するためのものであることを意識させる」ため、附属English Dayの具体的な目的を次の2点に定めた。

- 様々な国の文化や習慣にふれ、国際理解を深めるとともに自分たちの生活を振り返る。
- 日頃学習している英語を用いて、相手の話す内容が理解できたときの喜びや、自分が話す内容が伝わったときの達成感を味わう。

(2) 附属English Dayの実施システム

附属English Dayについては前述のとおり、中学生がなるべく小グループでゲストとコミュニケーションをとることができるよう、10名以上のゲストを招いている。開始年の平成22年度は12名の方に来ていただいたが、平成24年度からは16名の方に協力していただいている。実施時期は、1年生が少し英語に慣れ、また定期テストや教育実習・学校行事等に重ならない時期を考慮し、11～12月の2日間を選んで。本年26年度においては、12月8日・9日に実施した。

ワークショップは、学年ごとに2時間ずつを設定して

いる。16名のゲストが、校内16カ所に分かれ、それぞれに準備した20分間のワークショップを同時に展開する。中学生は、1学年約140人が16グループに分かれ、20分間ずつ、異なったワークショップを3カ所訪れ、英語で様々な文化等について学ぶ。1年生のスケジュールは次のとおりである(図2)。

Students	December 9 th (at 1,2 period)	International Guests
Opening Ceremony	9:00~9:10	Opening Ceremony
Move to the 1 st WS	9:10~9:20	→Each room
Workshop ①	9:20~9:40	Workshop
Move to the 2 nd WS	9:40~9:50	Rest and preparation
Workshop ②	9:50~10:10	Workshop
Move to the 3 rd WS	10:10~10:20	Rest and preparation
Workshop③	10:20~10:40	Workshop
Closing Ceremony	10:40~10:50	Closing Ceremony

図2 附属English Dayのスケジュール(1年生)

ゲストの出身国は英語圏だけではなく、ナイジェリア、スリランカ、ギニア、ベトナム、インドネシア、コロンビア、ホンジュラス、キューバ、バングラディッシュなど多岐に渡る。ワークショップの内容は、各ゲストに任されているが、それぞれの国の場所・地理・気候・自然・食べ物・住居・生活様式・学校の様子・スポーツ等、例年非常にバラエティに富んでいる。ワークショップの方法としては、パワーポイントなどを使ったプレゼンテーションをはじめ、過去には、体育館で子ども達と実際にクリケットをしたり、(ゲストの出身国の)唄やダンスを生徒と一緒に楽しんだりすることもあった。

中学生にとっては、それぞれの国の訛りが残った英語を聞くことで改めて、英語は各国で使われていることに気づく生徒も少なくない。1年生は、日々の学習で学んだことが実際に活用できる喜びと、何を話されているのか理解できないもどかしさを感じる。2年生は、前年度のもどかしさや悔しさをリベンジするが如く熱心に聴いたり、質問したりする姿がうかがえる。3年生にもなると、各教科で学んだ知識や技能と自分が聞きたいことを結び付けながら質問することができるようになる。また、深い内容を知る喜びを感じる生徒も多い。ワークショップ自体の時間にすれば、学年当たり60分間ではあるが、生徒の学びは深く、その後の学習に及ぼす影響力も強い。だからこそ、後述のアンケート調査に表れているように、その後の外国語学習に対してモチベーションも高まり、日々の学習を価値付けることができる。この意欲こそが、さらなる自己の伸長を図る姿につながると考える。

英語教育コースの学生については、ワークショップ実施の2ヶ月ほど前に、附属中学校において、附属中学校の教員と学生、留学生が一堂に会して全体でのミーティングを行う。続いて、各ワークショップのグループに分かれ、企画・準備を開始し、その後ワークショップ当日まで、学生は担当のワークショップにおいて留学生と連絡をとりながら準備を進める。中学生にふさわしい活動や英語のレベル等の調整は、学生に期待されているところである。また当日は、それぞれのワークショップにおいて、中学生が留学生の話していることが分からない場合などに、分かりやすい英語に言い換えたり、適宜必要な支援を行ったりしている。

以下に、昨年度の取り組みから、具体的な活動を紹介したい。

3. 具体的な活動紹介（昨年度の取り組みから）

附属English Dayを4年間続ける中で、ゲストからのワークショップだけではなく、生徒達もワークショップを企画して、ゲストにも日本のことについて知ってもらおうという声があがってきた。この交流会の目的である「外国の方と直接コミュニケーションを図る機会をもつことによって、様々な国の文化や習慣に触れ、国際理解を深めるとともに自分たちの生活を振り返る機会をもたせる」から派生し、「自分達の生活や文化について外国の方に知ってもらおう（発信）」という新たな目標が設定された。

生徒が企画したワークショップの実践からいくつかを紹介する。

【名前の漢字を紹介する】

8名の生徒が一つのグループとなり、それぞれ自分の名前に使われている漢字を色紙に墨で書き、それを見せながら漢字の意味や名前の由来を説明した。例えば、「愛」という名前について、loveという意味であることを伝えるとともに、誰からも愛される子になってほしいという願いが込められていることも自分なりの英語で伝えるなどしていた。そして、生徒8名の漢字の中でゲストが一番気に入った色紙をプレゼントした（写真1）。



写真1 生徒が自分の名前を説明

【焼き魚の食べ方を紹介する】

箸を使って上手に焼き魚を食べることは日本人にとっても難しいことだが、外国の方にとってはなおさらである。しかし、そこに目をつけ、生徒たちは写真を使って分かりやすくゲストに説明していた。外国の方の興味をひく題材であり、この活動は新聞にも取り上げられた。

ゲストは箸で焼き魚を食べたことはあるが、上手に食べることはできなかったそうである。また、正式な食べ方があることに驚き、次に焼き魚を食べるときには正式な食べ方を挑戦してみたいと話していた。

【ふくわらい 双六で遊ぼう】

下は、日本の古くからの遊びを外国の方に体験してもらおうと企画したワークショップの写真である。英語で指示を出しながらふくわらいを楽しんでいる様子が見える。



写真2 生徒と福笑い

また、続いての写真は手作りの双六をしている風景である。マスには松江のクイズがあったり、松江についての情報が書かれていたりしている。サイコロを振り、マスを進みながら自然に楽しく松江について知ることができる仕掛けが施されていた。



写真3 生徒と双六

自分達がワークショップを企画する活動を通して、企画の段階では外国の方に日本の何をどのような形で伝えるのか、何が知りたいのか、楽しんでもらうにはどうしたらいいのかなど、相手意識をもって活動を考えることができたことは、コミュニケーションを図る上で大切な視点であると考えられる。また、活動の際には、自分が伝えたいことが伝わった時の喜びや、伝わらなかったときの

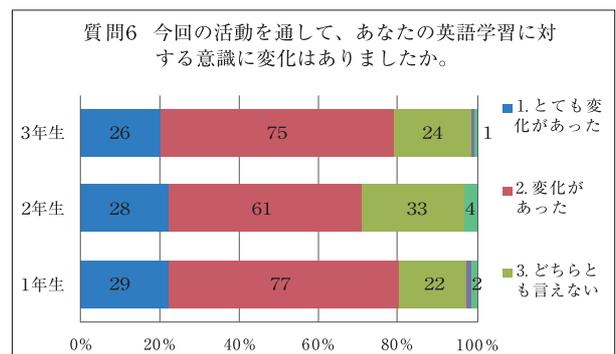
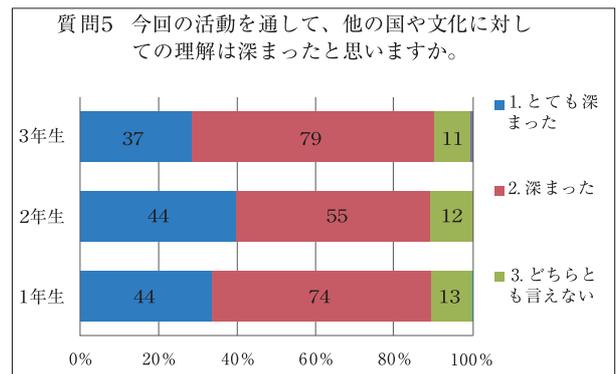
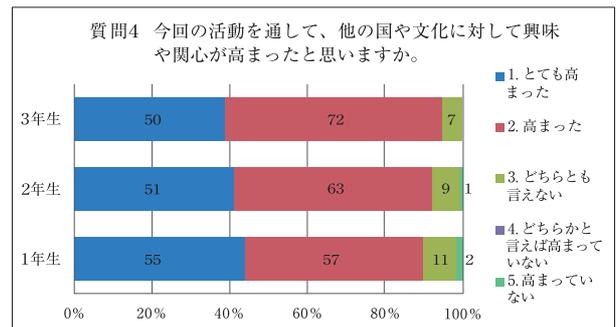
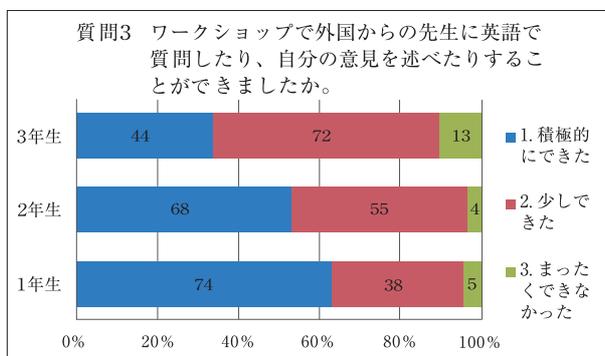
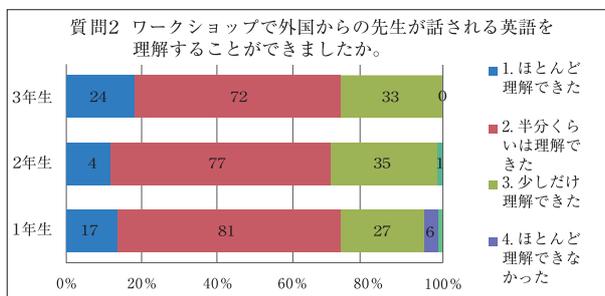
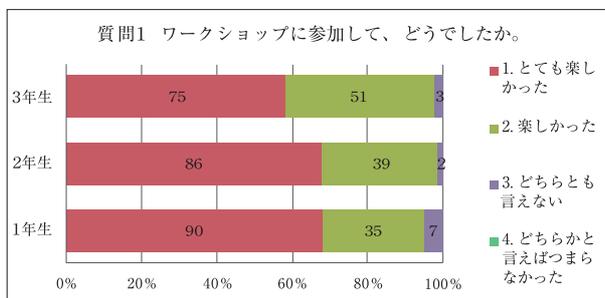
悔しさやもどかしさは今後の英語学習のよい動機となるのではないだろうか。これらがこの活動を通しての成果であると考えている。

4. アンケート調査の報告

(1) 中学生へのアンケート調査から

以上のような取り組みを通して、事前に発表や質問を準備し、三つのワークショップを回り、留学生と実際にコミュニケーションをとった中学生がどのように感じているかを、昨年度実施後のアンケート調査をもとに、中学生の感想をまとめる。

中学生のアンケート回答数と結果は以下の通りである(1年生 132名, 2年生 127名, 3年生 129名)。



アンケートの結果から、全体的には殆どの生徒がEnglish Dayを肯定的に捉えていることがうかがえる。質問1で「とても楽しかった」「楽しかった」を選んだ割合は、1年生95%、2年生98%、3年生95%であった。またEnglish Dayの目的の一つである、国際理解・異文化理解については、質問4の回答において、他の国や文化に対して興味や関心が「とても高まった」を選んだ生徒は、どの学年を通してほぼ4割であり、「高まった」を合わせると、3年生が95%、2年生89%、1年生85%に達している。

二つ目の目的である、「日頃学習している英語を用いて、相手の話す内容が理解できたときの喜びや、自分が話す内容が伝わったときの達成感を味わう」に関連して、理解と表現に関する質問項目を見てみると、質問2において、「ワークショップで外国からの先生が話される英語を理解することができましたか」という質問に対して、「ほとんど理解できた」「半分くらいは理解できた」を合わせると、3年生74%、2年生66%、1年生74%であっ

た。また、3年生は「ほとんど理解できなかった」「まったく理解できなかった」と答えた生徒は一人もいなかったのに対して、1年生は7名の生徒がほとんど、もしくはまったく理解できなかったと回答している。これは、学年が上がるにつれて英語の理解力が高まっていることを表しており、英語学習の成果であると思われる。

同様に、質問1「ワークショップに参加して、どうでしたか」という質問に「楽しかった」と肯定的な感想をもてなかった生徒が1年生に多いことから、英語の理解度が楽しさにも関係していると考えられる。このことから、今後はゲストに各学年に応じた難易度の英語を用いてもらったり、ワークショップの内容の改善を図ったりする必要があると感じている。

質問3の表現力に関する質問では、逆に3年生が他の学年に比べて積極的に英語で質問したり、自分の意見を述べたりすることができたと答えた生徒が少なかった。3年生は自分の力を客観的に判断し、控えめな答えになったとも考えられるが、他学年にはなかった3年生企画の「自分たちからゲストに日本の文化を伝える」というワークショップが大きく関わっていると思われる。このワークショップを通して、自分が言いたいことを伝えられなかったり、質問されたことに答えられなかったりする経験もたくさんしているからである。ここで、3年生の自由記述を紹介する。

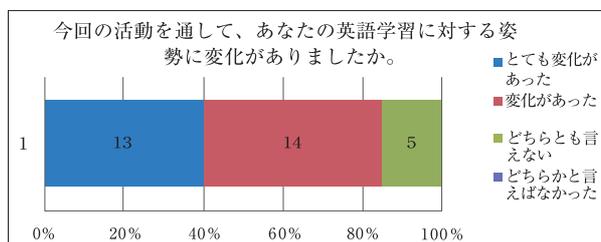
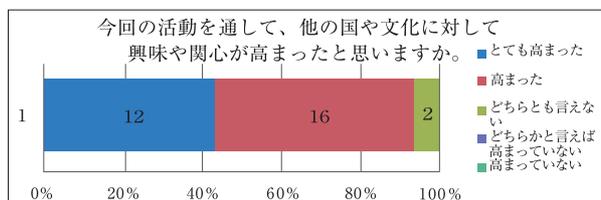
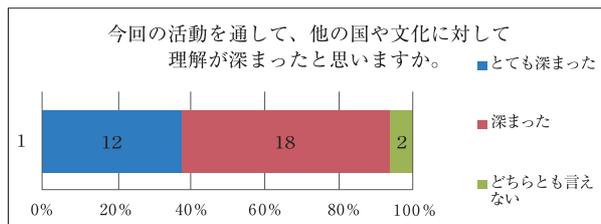
- ・頭の中でどういう文なのか考えてから話したりしたので、すっと出るようになりたい
- ・英文を形式に添って書いたり、読んだり出来る力に加えて、少し正確ではないが、言葉が次々に出てきたり、言いたいことがパッと口から出るように応用の力がほしいと思った
- ・もっともっと勉強をして、語彙やイディオムを覚えて、その場に応じて使えるようにしたい

これらのコメントからも分かるように、今の自分の力を実感し、なりたいたい自分、目標とする姿をはっきりとイメージし、今の自分に何が必要なかを理解できている。このことが英語学習への内発的動機付けとなり、主体的な英語学習につながっていくものではないだろうか。この点においても、English Dayの効果は子ども達にとって大きなものである。質問6の「今回の活動を通して、あなたの英語学習に対する意識に変化がありましたか」という問いに対して、「とても変化があった」「変化があった」と答えている割合が、3年生78%、2年生70%、1年生80%であることがうかがえる。変化の具体的な記述として、リスニングの向上に関するコメントが最も多く見られたが、これはゲストの話をもっと確実に聞き取りたいという気持ちの表れと考えられる。また自分の思いを英語で伝えるために英語力を高めたいというコメントも多く、文法や語彙の学習、さらには授業をしっかりと聞いておきたい、という記述も見られた。また英語に限らず「色々な国の言葉と話したい・知りたい」「色々

な国の人と話したい」という記述や、世界の人とつながるために、もっと英語をしっかりと学びたいというコメントも見られた。

(2) 英語教育コースの学生へのアンケート調査から

各ワークショップの企画段階から携わり、English Day当日は、中学生とゲスト双方の支援を行った英語教育コースの学生(2~4年生)にも、下記のとおり非常に有意義な活動であったことが、アンケート調査の結果からうかがえる。(N=32)



上記の結果に見られるように、留学生等とのワークショップの企画・支援に携わることにより、大学生にも、他の国や文化についての関心・理解の高まりが見られる。また、英語学習に対する姿勢への変化についても、32名中27名(84%)が「とても変化があった」「変化があった」と答えている。この変化の具体的な記述として最も多かったのは、英語力不足を痛感し、英語運用能力向上の必要性を感じた、という点であった。続いて、異文化への関心の高まりに関する記述も見られた。また記述式の質問の中で、「今回の専攻体験活動で、自分が最も学んだと思う事、もしくは一番驚いたことは何ですか」という問いに対して、最も多かったのは、中学生の英語のレベルの高さと英語使用に対する積極性であった。続いて、留学生の出身国等の違いによる英語の違いであった。また「参加していた中学生を見て感じたこと」に関する記述には、1年生から3年生までの、英語の習熟度だけではなく、心身の成長の違い、そして学年による支援の仕方の工夫等の指摘が多かった。

このように、5年目を迎える附属中学校英語科と英語

教育コースのプロジェクト「附属English Day」は、中学生だけでなく大学生にも、貴重な学びの機会を提供していると考えられる。

5. 今後の課題

5年間の中で前年をもとに、できる限りの改良を加えてきたが、さらなる課題としては、まず実施時間の制限への検討が挙げられる。現在、各ワークショップ20分となっているが、留学生と大学生からは、30分は必要だという指摘が、常に出ている。しかしながら、英語が苦手な中学生を考慮すると、英語だけのワークショップは20分が限度ではないかという点と、1学年2時間の枠の中で、生徒達がなるべく複数のワークショップを経験しようとする、20分になってしまう、という現状がある。

続いて、各ワークショップの内容についてであるが、これまでのところ、各ゲストに任せ英語教育の学生が支援をしている。学年によって内容の変更は殆どないが、使用する英語や対応の仕方は、学年によってさらに工夫が必要とされる。

附属中学校ではEnglish Dayの実施に向けて、授業の中でも様々な工夫を行ってきた。日本の英語教育が大きく変わろうとしている今、附属中学校にとっても英語教育の学生にとっても、この協働プロジェクトが、英語学習への貴重な動機づけになり、グローバル人材の育成の一助になる事を期待したい。